

自己の存在

同じ地上に同じ人間として生まれてきました。もう一度はつきりと考えなおしてみるので。

過去・現在・未来、三世を通じて、たった一度、私という存在として、他のだれとも違う私として生まれてきているその事実、それについて、もつと明確な意識を持つて下さい。

「何が一番大切ですか？」

「それは私自身です。」

「それはほんとうですか。今一度確かめます。それはほんとうですか。」

それさえはつきりわかるならば、私の言うことはわかるはずです。そうです。金も尊い。家も尊い。学問も尊い。衣服も大切、しかしながら私あつてこそ、それらは必要なのです。たとえ一億円の金をくれたからとて、私とかえることはできません。そのいちばん尊い私を、今までそんな考えで一度も見てやらなかったことはありませぬか。

「驚く心」それは人間の心に与えられた尊い神秘であります。何を見てもおどろかぬ人には、一生涯、高い芸術も、尊い宗教も、有益な発明も、何も生まれてはきませぬ。雷を聞いておどろいたり、高い所から落ちておどろいたりするのは馬だつていたします。友が立派な奥様になったのを驚く人はあるでしょう。しかし自分が人間であることに、一度でも驚きの眼を見はった人が何人あろう。あなたはあなたについてまづ知らなければなりません。

「私の昔の学級の中に女子が三十人いました。その中で私は成績も身長も中程でした。」

それは学校の帳簿や教室の中のことです。私のいう意味はそれとは違います。あなたという方は全宇宙にいま一人ないのです。過去にも現在にも未来にも外には私はいないので。その私が今までどうなっていたのでしょうか。

ただ、風のまにまに流されてきたのではありますまいか、いいえ、はつきりとした何の考えなしに、あなたの周囲ばかりを見まわして、泣いてきたのではありますまいか。さめたる者は決して自分をわけのわからぬ一つの存在として、わけのわからぬ世界に流されるままにしておくことはできません。それは足のない幽霊だからです。